

## 白き道筋を辿る

「え、信越線へ？」

「そうだ。サンダーバードと一緒にな」

はくたかが上司から告げられた命令は、今までに例のないものだった。

上司は詳細が書かれた書類を一枚、はくたかへ差し出した。日程の他、時間と現地での大まかな行程が示されているその書類に目を通しながら、眉根を寄せるはくたかに、上司が苦笑する。

「JR東日本新潟支社と、北越急行からの要請だ。直江津から妙高高原までの間をお前達に走って欲しいと」

「これは何かの実験でしょうか？」

「さて、どうだろうな。詳しい目的までは私まで伝えられていないんだ。だが、上から許可が出たと言う事は、支社長か、もしくはそれよりも更に上の人が了承したということだ。……今回の走行予定区間は北陸新幹線開業後に第三セクターへ経営分離される区間だ。向こうも何か思うところがあつてのことだろうな」

「第三セクター」

「そう、えちごトキめき鉄道の管轄になる」

ただし、天候と向こうの積雪量によつては中止になる可能性もある、と上司が付け加えた。一月末から二月にかけての数週間は、一年のうちでも特に雪が多く降る時

期だ。数年前にサンダーバードとしらさが雪の中に閉じ込められた時も同じ頃だった。

今はまだ新潟も大した積雪量ではないというが、今年も大雪予報が出ているから、油断は出来ない。

はくたかはきゅつと口をむすび、頷いた。

「わかりました」

「車両は、北越急行の683系付属編成と、サンダーバードの683系付属編成を連結した六両編成を使ってくれ。既に輸送指令には連絡済みだからな」

使う車両を聞いたはくたかは、珍しい事もあるものだと思いつつ、執務室を後にした。

北越急行の683系車両は、はくたかが使っている車両の中でも六両の基本編成と三両の付属編成を合わせた九両一編成しかなく、基本的には「はくたか」以外の運用では使用出来ない事になっていた。

もうずっと昔の事だが、京阪神エリアでの人身事故によりサンダーバードのダイヤが大幅に乱れた際、定期点検を終えたばかりで予備車扱いとなつていたその車両を使わせてくれと北越急行に打診したところ、「はくたか」ではないから、という理由で断られたという話を聞いた事がある。

だから、今回命令があつた謎の試運転に、北越急行の車両を使わせてもらえるということが、はくたかは俄に

信じられなかった。別に北越急行の車両を使わなくても、西日本の所有している681系ホワイトウィング編成を使つたつて良かったはずだ。

それとも、683系を使わなければならない理由でもあるのだろうか？

上司には分かりましたと頷いたものの、至る所が腑に落ちない。もやもやとした気持ちを抱えながら、はくたかは休憩室へ足を向ける。

「おつかれさまです」

そう言つてドアを開ければ、部屋の中には先ほど上司との間で話題に上つた当該人物——サンダーバードがいた。サンダーバードは部屋に入つてきた人がはくたかだと気付いた途端、座つていた椅子から立ち上がった。

「おいはくたか、聞いたか？」

「信越本線を走る話？」

「そうそう！もしかして今聞いたばかりか？オレもさつき上司に呼び出されて、その話を聞かされた所だ」

二人は並んで部屋の中程に置かれたソファに腰を下ろした。そして、上司から渡された書類に改めて目を通す。

「サンダーバードつて、信越本線を走つたことある？」

「うーん、ずつと昔、『サンダーバード』として走り始めてから数年しか経っていないような頃は、何度か臨時

のスキー列車で信越本線に乗り入れた事はあつた気がするけど、あんまり覚えてないなあ」

「俺も昔に一度か二度乗り入れた事はあつたような気がするけど……少なくとも、その時はまだ485系を使つていた頃だつた気がする」

もう十年以上も昔の話で、互いに記憶は曖昧だつた。ただ、寒い時期で、スキーへ向かう人たちを運ぶための臨時列車だつたことだけは覚えていた。

「越後湯沢はもうかなりの雪なんだろう？信越本線も豪雪地帯だつたと思うけど、もう沢山積もつてるのか？」

「うん、越後湯沢はもうたくさん積もつているけど、直江津辺りはそうでもないよ。あの辺は海も近いし……でも、直江津から先の信越山線つて呼ばれているエリアは、やっぱり雪が多いみたいだ」

「そうか。うう、ちゃんと走れるか心配だな」

「サンダーバードらしくないなあ。俺は少し楽しみなんだ」

「何が？」

「サンダーバードと一緒に信越本線を走る事が。そもそも仕事で一緒にどこかへ行くつて、これまでなかつたことだし」

サンダーバードとはくたか、そしてもう一人の近しい同僚であるしらさぎは、それぞれ大阪、越後湯沢、そし

## 白き道筋を辿る

て名古屋と向かう場所が異なる。一部区間で同じ場所を走る事はあつても、誰かと同じ目的地へ向かうことなど、普段の運用ではあり得ないことだつた。

「そうだな。一緒に出かけるのつて、駅から近い場所か、もしくは仕事と全く関係ない時だけだつたからな」

「そうそう。だからさ、楽しみだよ」

天気が悪くならないといいな、と言うはくたかかの横で、サンダーバードは大きく領きながら、内心ほどきどきして仕方がなかつた。なるべく意識しないようにしていたが、二人だけで——もちろん列車を動かす運転士や車掌、そして今回の試運転を仕組んだ社員たちは同乗するのだろうか——信越本線に行くなんて、これはまるで公認のデートのようではないか！と一人舞い上がつてしまふのも無理はない。

以前、勢いではくたかかに対する想いを告白したものの、返事は保留となつたままであり、今となつてはもらえないものと諦めつつあるが、サンダーバードがはくたかの事を想う気持ちは、消えてしまつたわけではなく、ずつと一定の熱を持つて胸の中に燃え続けている。

「オ、オレももちろん楽しみだよ！」

「二人で何を楽しそうに盛り上がつてるんだい？」

その時、こんこん、と大きなノックオンがした。二人が顔を上げると、開いた扉に寄りかかるようにして、も

う一人の同僚であるしらさぎが立つていた。名古屋からの帰りらしく、手にはこのところよく目にする菓子店の袋がぶら下がつていた。しらさぎによると、この店のバームクーヘンは大変な人気で、今は多少落ちついたものの、オーブンしたばかりの頃は長時間並ばなければ購入することも難しいほどだつたらしい。

「お土産、買つてきたよ」

「何がお土産だよ。自分が食べたいだけだろ？」

「しらさぎはそのバームクーヘンが好きだね」

「美味しいからね。でも、この前はくたかが研修の帰りに東京駅で買つてきてくれたのも美味しかったよ」

そう言うと、サンダーバードが頬を膨らませる。

「オレが人混みを掻き分けて大阪で買つてきたおかきについてはノーコメントなのかよ！」

「あれも美味しかったよ？」

「あれは私たちよりも、北越さんが大喜びしてたじゃない。これは酒がすすむぞつて」

甘い物ばかりもなんだからと、サンダーバードがこの前買つてきたのは、いろんな味のおかきやあられだつた。チーズ味やマヨネーズ味など、あまり金沢のお店では見かけないような味が多く、皆で珍しがつて食べた。

おやつがあるならお茶かコーヒーを淹れるけど、どっちにする？ とはくたかが二人に声を掛けた。その間い